職能科通信 60 号

2025 年 2 月発行

職能科通信　検索

〒243-0121
神奈川県厚木市七沢 516
神奈川ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病院
職能科
TEL&FAX 046-249-2571

【高次脳機能障がいセミナー就労支援編　研修報告】

2024 年度高次脳機能障がいセミナー就労支援編「復職に向けた支援～退院後から復職に向けて準備していくこと～」を 2025 年 1 月 18 日に開催いたしました。今回のセミナーでは、当院から「復職支援における医療機関の視点と関わり」と「生活を支える復職支援」を行い、神奈川障害者職業センター所長小田訓様より「復職支援における障害者職業センターの役割と活用の視点」、就労継続 B 型事業所スペースナナ施設長生方克之様より「復職支援における就労継続支援事業所の役割と活用の視点」の講演を行いました。また、当事者・ご家族より、くも膜下出血を発症してから復職までの経過をお話ししていただきました。

復職支援における医療機関の視点と関わりでは、限られた休職期間の中で症状や障害特性に合わせたアセスメントと職場制度や休職期間に合わせたプランニングの重要性を説明させていただきました。生活を支える復職支援では、当事者支援だけでなく、ご家族は目の前の当事者をみて、今後、どのような生活になるのだろうかと不安を感じることがあるため、ご家族全員が安定した生活を継続するために傷病手当金・障害年金などの情報提供を行うなど、少し先の見通しを伝えることが大切とのことでした。復職支援における障害者職業センターの役割と活用の視点では、障害者職業センターの利用できる具体的な支援として、①職業相談・職業評価、②職業準備支援、③ジョブコーチについてご説明いただきました。活用の視点として、適切な時期に復職に必要な情報を、当事者・支援者・事業所との情報共有・共同していくため、計画的な活用が良い支援につながるとのことでした。復職支援における就労継続支援事業所の役割と活用の視点では、休職中には緩やかな変化（改善）がみられるため、時間の活用（回復・学習、再獲得、適応）をマネジメントし、活動を通して本人の意思形成をサポートすることが有効的とのことでした。

高次脳機能障がいの方が退院した後、適切なアセスメントとプランニングを行う支援者がいないと、やることがない、通う場所がないなど日課や役割を喪失し、孤立してしまうことがあります。復職を目指す場合、生活の安定と自己理解、職業準備性はとても重要なキーワードとなります。本人の立場に立ち、次のステップを促す支援者がいるかどうかで、職業生活、人生が左右されるということを忘れてはならないと思います。私たちの支援が全てではありませんが、一人でも復職に向けて次のステップを促す支援者が増えればと思いセミナーで情報の共有や発信を続けていきたいと思います。（作業療法士　露木拓将）

【高次脳機能障がいセミナー実務編　研修報告】

2024 年 12 月 14 日（土）、神奈川工科大学 IT エクステンションセンターにおいて、地域リハビリテーション支援センター主催の高次脳機能障がいセミナー実務編を開催いたしました。今年度のテーマは、「ちょっと困る行動へのアプローチ　～治療的環境について考える～」でした。

セミナーでは、高次脳機能障がいのある方々が入院生活、在宅生活、社会参加、就労といった各ステージで安定した生活環境を築くことの重要性についてお話しました。そのためには本人、家族、支援者が連携し、安心して生活できる基盤を作るための工夫が必要であることを強調しました。また、実際の事例を通じて、職能科での関わり方や入院から就労定着に至るまでのアセスメントとアプローチ方法を紹介しました。

今後も復職や社会参加を支援するために、本人、家族、支援者と連携し、安定した生活基盤を築くお手伝いをしていきたいと考えています。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

（作業療法士　増子寿和）

【就業支援スキル向上研修　参加報告】

2025 年 1 月 29 日(水)～1 月 31 日(金)の 3 日間、令和 6 年度就業支援スキル向上研修に参加しました。1 日目は職業リハビリテーションに関する調査研究報告の聴講とヒューマンスキル演習を行いました。ヒューマンスキル演習では、グループワークを行い、ほかの参加者の方から傾聴の姿勢を学ぶとともに自身の面談場面などの対応を振り返ることができました。2・3日目は精神障がい・発達障がい・高次脳機能障がいの各コースに分かれ、職業準備性の向上や職場定着に関する支援技法の活用についての講義およびケーススタディを行いました。今回参加した高次脳機能障がいコースでは、注意障がい・記憶障がいに対する学習カリキュラムと復職におけるアセスメントについて学ぶ内容となっていました。学習カリキュラムは体験的な気づきに結びつけることが目的となっており、「できた」「できない」ではなく「どのような工夫をしたか」「今後自身にどう活用できるか」を見つけ出していくことがポイントであると感じました。また、ケーススタディでは、これまでの研修内容を踏まえて、課題点や支援方法を検討し、活発な意見交換をすることができました。

今回の研修で学び得た内容を実際に活用しながら、さらにより良い支援を行えるよう努めて参ります。

（社会福祉士　畠山咲）